

# 花川病院

症 例 概 要 患者氏名：20代 男性 診断名：右被殻出血術後 障害名：左片麻痺、高次脳機能障害

入院期間：令和A年B月C日～令和A年D月E日

経過：令和F年G年H日赴任先のK市にて頭痛・嘔気・左上下肢麻痺症状等で右被殻出血発症。K病院へ救急搬送。翌日瞳孔不同出現し緊急で開頭血種除去術施行。令和A年I月J日K市の急性期病院より回復期病院へ転院。4ヶ月経過しても歩行困難なため、令和A年B月C日自宅のあるS市でリハビリ継続し歩けるようになりたい希望を持ち当院を選び転院。

## 内 容

既往歴：高血圧症、腎機能障害・慢性糸球体腎炎疑い

病前生活：仕事は冷凍庫内のフォークリフト作業。H県へ転勤予定のため、F年G月よりK市のホテルで生活。

ご本人の希望：歩けるようになりたい。家に帰りたい。

### 【経過】

入院時は重度感覚障害と注意機能障害、上下肢共に異常筋緊張がみられた。特に麻痺側下肢の筋緊張亢進が見られ、立位保持ではクローヌスによる動揺著明で荷重困難であった。歩行は荷重時の膝折れが著明で重介助を要していた。麻痺側上肢・手指は随意運動困難、感覚障害や注意機能障害の影響もあり麻痺側上下肢の管理が不十分であったため、起居動作や移乗動作で介助を要していた。入院後1回目のカンファレンスでは“よくて車椅子自立レベル”との見立てだったため、ご本人も「それなら家に帰ってもしょうがないから施設でも良い」と話されていた。

しかし、クローヌスに対する主治医からの内服処方や病棟での歩行練習、リハビリでのWelwalkによる歩行練習などにより、「歩けるようになりたい、家に帰りたい」との希望を話すようになり、そこから自宅退院へ向けて支援を行うことになった。

入院後1週間でWelwalkによる歩行練習を開始、1ヵ月でWelwalk上見守り歩行獲得。3ヶ月経過時点で杖と短下肢装具使用して見守り歩行可能となった。退院時は屋外歩行も付き添いあれば可能となった。また感覚障害や注意機能の改善がADLの改善につながり、病棟スタッフとのコミュニケーションも円滑に取ることが可能となった。

入院中、発熱がみられていた期間もあり、その間は食欲低下、体力低下、発熱のためリハビリができない日々が続いたことや、3回のおんかん発作を発症し、3回目は退院日の前日に起きたことで退院が延期となった。そのため精神的な落ち込みもあったが、K病院を受診し、内服調整するとともに、退院後のフォロー（かかりつけ医や訪問リハビリや市の障害者相談支援事業所への連携など）ができるように調整することで不安を払拭することができた。

家屋環境調整後、令和A年D月E日自宅へ退院。発症後約4か月経過後に当院転院された患者様であったが、当院による先進機器の有効活用、チームアプローチを行うことで、一度は諦めかけた「歩けるようになりたい、家に帰りたい」という希望を叶えることができた症例である。

#### 【入院時と退院時の評価】

<FIM>入院時64点→退院時107点